

平成 21 年 4 月 16 日現在

研究種目：基盤研究（B）・海外学術

研究期間：2006-2008

課題番号：18401038

研究課題名（和文） 東アフリカにおける暴力の諸相に関する人類学的研究

研究課題名（英文） Anthropological Studies On Aspects Of Violence In East Africa

研究代表者

慶田 勝彦（KEIDA KATSUHIKO）

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：10195620

研究成果の概要：

4名の研究者はケニア海岸（南部・北部）、エチオピア、コモロ諸島で毎年（3年間）およそ1ヶ月の現地調査を行った。現地調査を通じて、これらの地域で生じた、あるいは生じている暴力的な現象が過去の植民地化の過程で作られた政治的なカテゴリーや経済的な情勢の変化によって作られた集団性と不可分の関係にあること、また、現代のネオ・リベラリズム（新自由主義）やグローバル化の影響を受けていることが示された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2007年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2008年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	11,300,000	3,390,000	14,690,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：エチオピア、ケニア海岸、コモロ諸島、植民地主義、難民、集団的悪意、開発と妖術、文化的想像力

1. 研究開始当初の背景

（1）これまでの人類学的研究は暴力を特定の共同体的な文化的事象として語る傾向にあったが、現代アフリカにおいて多発している暴力は文化の側面だけでは説明しきれない多元性を有して展開していたため、その多元性の一端を現地調査から明らかにしようと試みていた。

（2）現代アフリカの暴力的な現象は、土地、人権、民族、人種、宗教、世代、貧困など各地域によって主題化される位相が異なって

いたため、暴力の普遍的メカニズムよりも各地域で生じた、また生じている暴力が各地域の人々によってどのような経験として現れているのか、そして、その経験について人々はどのように語っているのかを知る必要性があった。

（3）本研究はコマロフ夫妻（人類学者）やM.マムダニ（政治学者）などの研究に触発されており、現代のアフリカで重要な問題となっている暴力的な現象を人類学的に解明していく研究の一つとして組織された。

2. 研究の目的

本研究はアフリカおよび世界各地で生じている暴力の諸相を解明するための人類学的研究の一環である。以下、本研究課題の具体的な目的を示しておきたい。

(1) 従来、アフリカで生じてきた暴力を語る際に支配的だった加害者と被害者という語り口それ自体を問題化し、暴力を多元的に捉える理論的可能性を探究する。

(2) 各研究者がフィールド(ケニア、エチオピア、コモロ諸島)で生じた/生じている暴力的な事象の歴史性を政治や経済の動態に注目しながら明確にする。

(3) 上記(2)で明らかとなる局所的な暴力の現象と世界的なネオ・リベラリズム(新自由主義)やグローバル化(世界の画一化よりは、世界の格差化としての)との関係を検討し、現代アフリカで生じている暴力的現象についての理論化を試みる。

3. 研究の方法

(1) 本研究では2つのアプローチを起点とした。

第1のアプローチは、政治学者 M. マムダニ(2001)が示した考えに依拠するもので、暴力を政治的アイデンティティの観点から検討するものである。マムダニはルワンダのジェノサイドにおけるツチとフツの関係を固定的な被害者(ツチ)と加害者(フツ)との民族対立とはみていない。彼は植民地化および独立以降のルワンダの歴史過程の中で形成されていった人種(非ネイティブ=ツチ)とネイティブ(フツ)との市民権獲得をめぐる闘争の構図そのものの政治性に注目している。ここには暴力のある民族の宗教的、文化的本質によって説明するのではない方向性が政治的アイデンティティという用語で示されている。このアプローチを政治的アイデンティティからのアプローチと呼んでおく。

この第1のアプローチは、暴力を共同体内部の文化として記述してきた従来の研究の限界を示し、政治的に作られたアイデンティティが現代アフリカ社会の暴力をどのように誘発しているのかについて検討するための有効な視座を与えるが、一方で現地の人々の暴力に対する社会・文化的想像力の民族誌的記述の次元を軽視する傾向にある。本来は個人が経験するしかない暴力は、なぜ集団的な憎悪、悪意、敵意などとして民族や宗教的カテゴリーに結びつく暴力とへ変換

されていくのだろうか。コマロフ夫妻(1999)は、人々の悪意や憎悪を集団的他者へと向けていく領域を社会・文化的想像力と呼び、特に暴力にも結びつく想像力をオカルト的想像力として主題化した。第2のアプローチは、この観点からなされるものであり、社会・文化的想像力からのアプローチと呼んでおく。

本研究は、上記2つのアプローチを起点とするが、各研究者が対象とする地域やそこで生じている出来事も異なるため、このアプローチの正当性を実証しようとするものではない。重要なのは、我々の目に暴力と見える行為や出来事が、どのような歴史的な過程の中で発動し、また、どのような経緯をたどったのか。そして、その行為や出来事を現地の人々はどのように語り、また対処しようとしてきたのか、その実態を明らかにすることである。そのために、以下のような人類学的フィールドワークを実施する。

(2) 毎年(3年間)、各研究者は最低1ヶ月以上の現地調査を実施し、各フィールドにおいてどのような行為や出来事を暴力として認識しているのか、また、その行為や出来事がどのような位相で語られるのかを明確にする。また、調査には現地の古文書館や各地方役場に存在している行政資料等の収集も含まれている。

(3) 毎年(3年間)、最低1回の調査・研究報告会を行い、上記2点について議論しながら研究の方向性を確認する。

4. 研究成果

(1) 個々の調査研究から、暴力の問題は従来の人類学が試みてきたように共同体内部の文化的メカニズムとして語ったり、より広くその社会の宗教、政治、経済等を含む文化的システムの問題として理解したりするだけでは限界があることが分かった。

上記に関する具体的成果は各年の調査・研究報告会で以下のように示された。ケニア独立期の「シフタ戦争」の影響で生まれた海岸北部の「難民」は、それまでのエスニック・グループや人種集団とは異なる性格が政治的に付与された集団であり、その政治的性格は現在でもその集団のアイデンティティの一部となっていることが示された(慶田)。エチオピアで生じた「民族」紛争は、民族同士の歴史的対立以上に独立国家が作った新たな行政区によって生じたものであることが歴史的資料と現在のフィールドワークの資料から示された(田川)。また、コモロ諸島における共同体の「悪態」が暴力には発展せずに共同体の儀礼的な遊びへと転

換されている事例は、同時に、危険を伴うフランス（マルセイユ）への密航者たちの社会・文化的想像力の領域とも関連していた。さらに、アンジュアン島紛争の最新のレポートを行いながら、メディアによって示される現地の「暴力」を現地の人々はいったいどのように経験するのかという暴力経験そのものの性格に関する問題が提示された（花淵）。一方で、妖術という一見すると共同的で、文化的にみえる信仰・実践は、現地の人々にとっても解決すべき問題であると同時に植民地政府にとっても解決されるべき問題となっていた事実を歴史的資料から提示し、本来は両者の「問題」の水準がまったく異質だったにもかかわらず、妖術についての異なる想像力が合わせ鏡のようにお互いを呪縛し、また規制していく領域が民族誌的に示された（浜本）。

このように、各調査地で確認されたアフリカの暴力は、それぞれの社会の歴史的プロセスにおいて政治的に作られたカテゴリーやアイデンティティと不可分に関係していること、ただし、このようなカテゴリーやアイデンティティは社会・文化的想像力の一部でもあるためその政治性や歴史性が見えにくいこと、そして現代のネオ・リベラリズムやグローバル化もまた、これまでとは異なるひとつの想像力として暴力的な領域に介入し始めていることなどを本研究の成果として示すことができると考えている。

（2）調査研究報告会では、暴力という一見自明な現象を研究したり、学術的に語ったりすることの困難さがしばしば議論され、暴力を人類学的に研究する際に留意すべきいくつかの点が示された。

暴力の学術的定義の困難さ

暴力は誰の目にもあきらかな現象であり、また、道徳的にも許されるべきものではないことは自明である、それゆえに普遍的に、学術的に定義することは難しいのも事実である。例えば、ある暴力は、しばしば他の（対抗的な）暴力を誘発するし、被害者は加害者にもなることがあるため、倫理的、文化的次元における暴力は、それぞれの歴史性を抜きにしてはそれを概念化したり、理論化したりするのは危険である。

現地の人々にとっての暴力

アフリカはメディアを通して紛争などの暴力が起きている場所として、しばしばその暴力性が映像によって示される。しかしながら、当の暴力が生じている場所周辺では暴力のリアリティが希薄なことも多い。暴力は現地においても局所的に生じるため、そのリア

リティは語りや映像といった表象を通じて示されることになる。そのため、暴力の人類学的研究においては、暴力の多様な表象化をめぐる力学を解明していく必要があるが、特にフィールドワークを通じて現地の人々がどのように暴力を語り、また描きながら表象化しているのかを丹念に記述していく必要性が確認された。

理論化について

暴力を共同体内部の文化的事象として説明するだけでは、現在のアフリカの暴力の多元性を捉えることはできない。とはいえ、個々人の生理的、心理的な特性だけでは集団性や地域性が際立っているアフリカの暴力を説明することはできないようにも思われる。現代社会においては、個人がいくつかの異なる関係性をどのような集団的アイデンティティとして明確にするのが常に曖昧になっているからである。おそらく問われているのは、個人がどのように、またどのようなものとして集団化されるのかという点である。それはもはや文化だけではなくて、個々人を集団化していく多元的な環境の実態とその歴史を理論化していく必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

慶田勝彦、ケニア独立期における暴力と海岸北部の暴力と逃走者たちの物語り、『東アフリカにおける暴力の諸相に関する人類学的研究』慶田勝彦、田川玄、花淵馨也、浜本満（平成18-20年度 科学研究費補助金・基盤B / 海外学術・研究成果報告書 研究代表者：慶田勝彦）1巻、1-28頁、2009、無。

花淵馨也、アンジュアン島紛争の動向—コモロ連合国における地域対立の新たな構図、『アジ研 ワールド・ドレンド』、158号、29-32頁、2008、有

田川玄、現代エチオピアにおける民族間の暴力の諸相—南部エチオピアのオモロ系集団ボラナと隣接民族との紛争—、『東アフリカにおける暴力の諸相に関する人類学的研究』慶田勝彦、田川玄、花淵馨也、浜本満（平成18-20年度 科学研究費補助金・基盤B / 海外学術・研究成果報告書 研究代表者：慶田勝彦）1巻、29-48頁、2009、無。

浜本満、開発とウィッチ・ハント：ケニアコーストにおける地域行政と妖術信仰、『東アフリカにおける暴力の諸相に関する

人類学的研究』慶田勝彦、田川玄、花淵馨也、
浜本満（平成 18-20 年度 科学研究費補助
金・基盤 B / 海外学術・研究成果報告書 研
究代表者：慶田勝彦）1 巻、71-149 頁、2009、
無。

〔学会発表〕(計 8 件)

慶田勝彦 東アフリカにおける暴力の
諸相に関する人類学的研究（科研費研究成果
報告会）第 5 回フィールドリサーチ・セミ
ナー（熊本大学大学院社会文化科学研究科・
フィールドリサーチ研究コース・領域主催）
熊本大学、2009 年 3 月 24 日。

慶田勝彦、ポップアート化する祖霊-ケ
ニア海岸地方の祖霊木彫 Vigango の盗難をめ
ぐって-、POP AFRICA 研究大会、国土館大学
世田谷キャンパス、2008 年 11 月 16 日。

田川玄 南部エチオピアのボラナにお
けるラーガ raaga(予言者・占い師)について、
第 17 回日本ナイル・エチオピア学会学術大
会、弘前大学、2008 年 4 月 19 日。

〔図書〕(計 1 件)

田川玄、男が戦いに行くように女は愛人
をもつ、『セックスの人類学』奥野克巳・椎
野若菜・竹ノ下祐二共編、141 頁～166 頁、
春風社、2009 年。

〔その他〕

熊本大学文学部・文化人類学研究室所蔵雑誌等
「科学研究費研究成果報告書」
<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/ihs/soc/anthropology/lab.html#2>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

慶田 勝彦 (KEIDA KATSUHIKO)
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：10195620

(2)研究分担者

花淵 馨也 (HANABUCHI KEIYA)
北海道医療大学・大学教育開発センター・准
教授
研究者番号 50323910

(3)連携研究者

田川 玄 (TAGAWA GEN)
広島市立大学・国際学部・准教授
研究者番号：70364106

浜本 満 (HAMAMOTO MITSURU)
九州大学大学院・人間環境学研究院・教授
研究者番号：40156419